



魔界島の決闘



奇跡のラップタイム

春日信彦

博多に向かう

さやかとアンナは二人そろって休み。さやかはアンナのお父さんのことが気になっていた。アンナは父親のことは話したがらない。亡くなった母親は父親はデザイナーだということを一度だけアンナに伝えた。さやかはおそろおそろアンナに訊ねた。「アンナ、お父さんのこと本当に何も知らないの？」さやかはピンクのスカートをはいたプーさんを抱きしめる。「本当に何も知らないよ。だけど、ママの友達、名前なんと言ったかな～、サリーさん。よくうちに遊びに来てたよ。もしかしたら、サリーさんだったら何か知ってるかもね」アンナはぼんやりと天井の照明を見つめる。

「サリーさんね、それじゃサリーさんに会って聞いたらいいわ」さやかはプーさんを天井に向けて放り投げる。「会うって言ってもどこにいるか分かんないのよ。だけど、ナカスで働いていたときの友達って言っていたから、今でもナカスにいるかもね。確か、ママはダンサーのサリーって言ってたよ。そうね、年はママと同じくらいだから45歳くらいのはずだな」アンナは真剣な顔つきでさやかを見つめる。

「よし、早速、ナカスに行ってサリーさんを探そう」さやかは急にウキウキ。ピクニック気分のさやか。「バカなこと言わないでよ。もし、ナカスにいなかったらどうすんのさ」プーさんの頭をポコンと殴る。「そのときは観光旅行と思えばいいじゃない。最近、二人で旅行してないし〜」さやかはプーさんにキスる。

アンナは父親を知ることが怖かった。母親を捨てた父親を今でも憎んでいる。もし、父親が生きていても対面する勇気はない。なぜか、アンナの瞳に涙が光った。さやかはこのことにまったく気づいていない。アンナは話をそらそうと抱きしめているプーさんを取り上げたが、さやかは出立気分。

「早速、行くわよ。アンナ、いいわね」さやかはアンナの肩に手を置く。「分かったよ。久しぶりだな、博多」アンナはこぼれた涙をプーさんのスカートで拭く。11月1日(土) さやかとアンナは5時に起床。「さやか、それは何よ、中学生じゃあるまいし」さやかはピンクのミニスカートにルーズソックス。「え！かわいすぎるかしら」さやかはくるりと一回転。

二人は羽田空港を7時に出発。二人が乗ったボーイング777は70分で福岡空港に到着。地下鉄中洲川端駅近くにあるナカス・ロイヤルホテルに到着したのは午前8時45分。チェックインを済ませた二人は8階のレストランに向かった。窓際の席に案内された二人はナカスを見渡す。「アンナ、いい眺めね。ダンスホールってどこにあるの？」さやかはプーさんを膝の上に置く。「分かるわけないっしょ。まずは腹ごしらえ」アンナはゆで卵を大きな口でぱくりと半分食べる。食事を終え、レストランの出口を出ると二人の足が突然止まる。

「アンナ、今からどうしようか？」さやかはプーさんを抱きしめる。「そうね、昔住んでいたマンションにでも行ってみるか」アンナはさやかの頭をぼんとたたく。「ここから、近いの？」さやかは迷子の子供のように不安げにつぶやく。「福岡タワー近くのマンション」アンナが応えるや否やタクシー乗り場に急いだ。二人はタクシーに飛び乗ると運転手に福岡タワーを指示した。「さやか、タワーから海でも見よう。何か、名案が浮かぶかも」アンナは遠くにそびえたつタワーを指差す。

二人は展望台から海を眺め、名案はないかと考えては見たが、なんの手がかりも無いことに気づく。「アンナ、何か手がかりないかな～」さやかはプーさんを肩車する。「ママはパパとよくタワーでデートしていたと言ってたの」アンナは子供のころ聞いた話を思い出す。「なるほど、これは重要な手がかりだな。二人は海を見ていたわけね。そこで二人は将来の話しをしていた。パパははるか海の向こうのヨーロッパに憧れていた。デザイナーだったわけだからイタリアかフランスに留学したいとママに打ち明けた。すでに、ママのおなかにはアンナがいたが、そのことは伝えず涙をこらえてオーケーした」さやかは一人で納得する。

「いつもの短絡的推理ね、当たってるかも知れないけど」アンナはぼんやり遠くに浮かぶ韓国行きの船を眺める。「パパはいつ日本に帰ってきたのか？それともまだヨーロッパにいるのか？」さやかはあごに左手の人差し指を当てる。「とにかく、サリーさんを探そうよ。きっと何か知ってるはずだから」アンナは右手の握りこぶしをさやかの顔の前に突き出す。

「ところで、ママってなにやってたの？」さやかは情報不足に気づく。「ストリッパーなの。友達のサリーさんもきっとストリッパーだと思う」アンナは子供のころ壁に貼ってあった母親のポスターを思い浮かべた。「そうなの、それじゃ探しやすくなったじゃない。すぐに、ストリップ劇場をあたればいいのよ」さやかは笑顔で親指を立てる。「そうよね！」アンナはさやかを置いてエレベーターに向かう。

インターネットで調べたストリップ劇場の事務所を探し当てたが、その所長は30歳前後の関西人で25年前のダンサーのことはまったく知らなかった。二人は浅はかな行動に肩を落としたが、ナカスのクラブで聞き込みをすることにした。友達サリーは色白のハーフで背丈は170センチ前後、あごに大きな黒子が一つある。

幸運にも、最初にあたったクラブ・カトレアの若いママが古株のママをがいるクラブ・エメラルドを紹介してくれた。古株のママの話からハーフであごに黒子のあるママが系列の由布院にあるクラブ・リリーにいることを知った。彼女の名前はサリーではなくキャサリン・亜紀であったが、二人は会うことにした。

エステ宮殿

11月2日(日)午前10時にチェックアウトを済ませる。レンタカーに向かった二人はアンナが最も好きなブルーのS2000を借りる。ナビで目的地を設定すると九州自動車道を150キロ前後でひたすら突っ走った。アンナはスピード狂で何度もスピード違反で捕まったがまったく懲りない。湯布院インター出口を出ると昨日予約した椿荘に向かった。キャサリンと約束した午後八時まで各自好きなことをすることにした。さやかは由布院の観光、アンナはエステで肌を磨く。

予約が難しいと聞いていたエステ宮殿だったが、なぜか簡単に予約が取れた。しかも、迎えが来ることになった。しばらくエステ宮殿からの迎えを待っていると、シルバーのロールス・ロイスがエントランスに止まった。白の燕尾服を着た執事の迎えを受けたアンナは、エステ宮殿に向かった。20分程市街地を走り小高い丘を10分程上ると、高さ約10メートルはある大きな門を構えたベルサイユ宮殿を思わせる建物が、右手の前方に光り輝いている。門からは幅6メートル、長さ50メートルほどの鏡のような大理石の道が玄関まで続いている。

車が玄関前に止まると、背の高いモデルのような執事は、すばやく車から降りドアを開け、女王に対してするように跪いて挨拶をする。「いらっしゃいませ、お嬢様」執事はアンナの手をとると手の甲に軽く唇を当てる。アンナはキスを受けた右手を左手で覆い隠しながら両手を胸に当てた。水晶でできたドアが自動的に開くと、アンナは緊張した足取りで中に入っていった。

「こちらへどうぞ」執事は右手をゆっくり前方に動かしアンナを誘う。玄関に入って左手方向には、幅5メートル長さ30メートルほどの赤い光を放つサファイアの廊下。左手の廊下に沿って8メートルほど歩くと、水浴びをしている三人の裸婦が彫刻されている黄金色のドアが威圧した。アンナがドアの前で3秒ほど立っていると、ドアは音を立てずにゆっくりと開いた。「どうぞ、お入りなさいませ」執事は頭を下げる。

アンナが部屋に入ると、そこは高さ5メートル、縦15メートル、横20メートルほどの空間がアンナを包んだ。部屋の中央にはお互いを見つめあうように10人の女性がグリーンの円形ソファに腰掛けている。右手の壁には20人ほどの入浴している裸婦が描かれている。アンナは驚きのあまり胸に手を当て肩をすくめた。

アンナがソファの女たちに声をかけようとするすると暖かい空気を背中に感じた。振り向くと、黄金の椅子に座った笑顔の女性がゆっくりと近づいてきた。その椅子は床から5センチほど浮いていた。純白の生地に鶴の絵柄の着物を着た30歳前後の彼女はアンナのそばまで来ると透き通る声で挨拶した。「はじめまして。チーフのマオと申します」

アンナが唖然としているとマオの後ろからイエローの椅子が静かにアンナの横にやってきた。「どうぞ、この椅子におかけください」マオは笑顔で椅子に目をやった。アンナがとまどっていると椅子が後ろに回ってきた。アンナがそっと腰掛けると椅子はマオの椅子の後ろに移動した。二人の椅子は西宮殿を出ると正面玄関の踊り場を通り過ぎて東宮殿に向かった。

踊り場から10メートルほど東に二人の椅子が移動すると左手のドアが静かに開いた。吸い込まれるように部屋に移動した二人の椅子は五つある丸テーブルの向かって左から二番目で止まった。「ここはベルサイユ宮殿みたいですね」アンナは目を大きくし驚きの声を発した。「ここはベルサイユ宮殿とサン・スーシ宮殿を参考に建設されましたのよ。お気に召しましたか」マオは自慢げな笑顔で五つのシャンデリアに目をやる。

「早速、エステをはじめましょう。後はエステティシャンに従ってね」マオが腕時計の白いボタンを右手の人差し指で押すとマオの後ろの壁がゆっくりと左右に開いた。そこには裸の美少女が立っていた。彼女は10歳前後で赤毛のモヒカンであった。「この子はアイというの。アイ案内して頂戴」マオはすっと立ち上がるとアンナを入口まで案内した。

壁の入口を入ると目の前には五色の湯船が並んでいた。「こちらから順番にお入りください。白はミルク、赤はワイン、透明はソルト、黄色は蜂蜜とレモン、グリーンはアロエと約10種類の薬草のお湯となっています。こちらのサウナは入浴後、5分間お使いください。入浴が終わりましたらエステを80分間行います」アイはゆっくりと丁寧に説明した。

アンナはそっと横目でアイの顔を見つめていた。アンナは入口横にある脱衣ルームで裸になり、説明にしたがって最初に白い湯船に入った。アイは湯船の横で黙ってアンナを眺めている。アンナは湯船の中から無表情のアイを上目づかいに時々観察した。アンナは入浴を終えるとサウナでびしょり汗をかいた。

アンナがサウナから出るとアイが富士山が描かれたバスタオルを差し出した。アンナが頭を拭いているとアイはピンクのタオルで足を拭き始めた。全身を拭き終わるとアイは丁寧にタオルを折りたたみボックスに戻した。ボックスの横には牡丹の花が描かれた扉があり、アイが近づくとゆっくりと扉が開いた。アイは何も言わず中に入り消えた。アンナはあわてて小走りでアイの後を追うと、目の前に現れた三人のシルクのドレスを着たエステティシャンがゆっくりとお辞儀をした。そこには少女はいなかった。

アンナはベッドに案内されると、うつ伏せに寝かされた。三人のエステティシャンは全身の肌ブルーベリー色のクリームを塗りこんだ。アンナは夜更かしをしたわけでもないのに眠ってしまった。目が覚めると約30分たっていた。何をされたかまったく憶えがなくぼんやりしていると、前方にある樽のようなものに案内された。樽の中央がゆっくり開くと中にある丸椅子に座らせられた。すると、樽はゆっくり閉まり、樽の上に顔だけが飛び出した。次の瞬間全身に生ぬるい液体が噴射した。

「きゃ〜」アンナは悲鳴を上げた。噴射は3秒のインターバルをとってリズムカルに行われる。噴射は全身の快感神経を刺激するように設計されており皮膚をリラックスさせる。10分の噴射を終えると樽は再びゆっくりと開いた。今度は仰向けにベッドに寝かされると金木犀の香りがする黄色いオイルを全身に塗られ、三人によるマッサージが始まった。エステが終わりほっとしているとアイが服を持ってやってきた。

エステルームの隣の部屋のソファでジャスミンティーを飲んでいると、グリーンのタンクトップに赤のミニスカート姿の女優のような美女が部屋に現れた。アンナの目は長くて美しい脚に釘付けにされた。一瞬、初めて会う女性かと思わせたが、彼女はマオであった。「最高級のエステいかがでしたか？最後にアンケートにご協力くださいますか？」マオはアンケート用紙をアンナの前に置いた。

アンナが5時ごろ椿荘に戻るとさやかはプーさんと遊んでいた。アンナは不思議なエステ宮殿の話をするさやかはいつもの推理する顔を見せた。アンナには黙っていたがさやかには漠然とした思いが浮かんだ。二人の行動が桂会長に伝わっているのではないかと。食事を済ませた二人はアンナのママの友達サリーという女性を探しに博多に、さらに湯布院にやって来たことをドクターにメールした。

アンナはクラブ・リリーをナビで調べると時速50キロで35分と分かった。二人は7時40分に椿荘を出立した。しばらくS2000を走らせているとアンナは先ほどエステ宮殿に案内された道を走っていることに気づいた。ナビはエステ宮殿の北門に二人を案内した。門の前につくと誰が乗っているのかを知っているかのように門はゆっくりと左右に開いた。門を入ると、燕尾服を着た執事が二人の名前を確認し、指紋を取った。二人は驚きのあまり目を見合わせた。執事は無線機で誰かと話をすると、二人に車から降りるように指示した。

入口横の警備室のような部屋に案内されると6人乗りのリニアモーターカーが待っていた。2分程リニアモーターカーで運ばれると宮殿の北エントランスが現れた。エントランスには純白の燕尾服を着た執事が待っていた。彼はアンナを先ほどエステ宮殿に案内した執事であった。執事はクラブ・リリーでなく王室のようなVIPルームに二人を案内した。二人が部屋にかかった印象派の絵画を見ていると和服姿の女性が現れた。彼女はエステのときに出会ったマオであった。

「あなたは！」アンナは驚きを隠せなかった。「また会いましたね、アンナさん。お待ちしていました」マオは二人の歓迎を予定していた。「まさか？マオさんがサリーさん？」年齢から予想していた女性よりもとても若く見えるサリーに感激した。「はい、私がサリーです」マオは二人の気持ちを見抜いた顔であった。

「サリーさんはママの友達ですね。教えてほしいんです。パパのことを。今、どこにいるのか」アンナは気持ちを抑えられず一気に思いをぶつけた。「確かにお母様のレイナさんとはダンサーのときの友達です。でも、レイナはつき合っていた彼氏のこと是一切私には話さなかったの。はるばるエステ宮殿まで足を運んでくださったのに、力になれなくて、ごめんなさいね」

二人は唯一の手がかりから何一つ成果を得ることができなかった。アンナは何度も考えたがサリーさん以外の手がかりは思いつかなかった。二人はパパ探しを諦めることにした。さやかはアンナにかける言葉が無かったが、アンナは成果がなくてほっとしていた。アンナの本心はパパは死んでいてほしかった。もし、生きていることが分かればきっと憎しみがいっそう膨らんでしまい、気持ちの整理がつかず、パニックになるのではないかと怖かった。ママが愛した人でもアンナには許すことができなかった。

* 魔界島の決闘 *

「アンナさん、さやかさん、大丈夫かい」引きつった顔の拓也は二人に声をかける。「先生、会えて嬉しいわ」アンナは拓也に飛びつき、抱きしめると左頬にチュ～をする。「アンナさん、とっても元気じゃないですか。心配して損しちゃったな」拓也は腰を下ろすとミッキーのハンカチでピンクのキスマークを拭き取る。「あら、先生の顔を見たから元気になったんじゃない。さっきまで、寝込んでいたのよ」アンナは拓也の横に腰を下ろす。

「アンナさん、残念だったね。人生は山あり谷ありだよ。三人で観光しようじゃないか。どこに遊びに行こうか？ そうだ、ガイドを呼ぼう。きっと面白いところを案内してくれるよ」拓也は笑顔で右手の親指を立てる。三人は出立の準備をすると、カウンターでガイドを依頼した。 さやかはプーさんを連れて行きたかったがアンナに止められ置いていくことにした。

15分ほどカウンターで待っていると二十歳前後のイケメンガイドがやってきた。拓也が大分は初めての観光だと伝えるとガイドはプランを説明した。「まず、ヘリコプターで阿蘇山、天草諸島、桜島を見学して、そこでお食事にいたします。午後の予定はそのときに説明いたします。サプライズをお楽しみにしてください」三人はヘリコプターでの観光と聞いて笑顔満面になった。

ガイドは三人をキャデラックに乗車させると由布岳に向かって走った。30分程走るとヘリコプターが二機待機した観光客専用のヘリポートに到着した。ガイドは二つのプロペラを備えた8人乗りのヘリに案内した。機内の空間は広く、中央には飲食ができる円形カウンターがあり、機体の左右は眼下を一望できる大きな窓となっていた。360度回転するシートは中央の円形カウンターの前方に四つ、後方に四つ設置されている。

進行方向左手のシートに拓也とガイド、右手のシートにさやかとアンナが着座した。全員がシートベルトをすると機体は心地よい音で離陸した。離陸後5分程するとパイロットはアナウンスを始めた。「このたびイーグル社をご利用いただきありがとうございます。皆様をお迎えした電機ヘリコプター、シルバーウィング888での観覧をお楽しみください。後10分ほどで久住高原上空に参ります」きれいな声のアナウンスは女性の声であった。

「あそこにもヘリコプター、あら、手を振ってるわ」さやかは右手のアンナの顔をのぞく。「さやかだったら、ガイドさん双眼鏡貸してよ」ガイドはシート前方にあるボックスから双眼鏡を取り出し三人に手渡す。アンナはしばらくブラックのヘリを双眼鏡で覗く。「あの女性、サリーさんじゃないかしら」アンナがつぶやくと「隣の男性は桂会長じゃない」とさやかがつぶやく。拓也はシートを180度回転させるとすばやくアンナの横に駆け寄り双眼鏡を覗く。

「確かに、男性はあの桂会長だよ」拓也は双眼鏡から目を離すとアンナの顔を見つめた。ガイドが怪訝な顔をしているとアンナはブラックのヘリを尾行するようにと叫んだ。ガイドは2Fに上りパイロットに指示すると拓也のところにやってきた。拓也が事情を説明するとガイドは頷いたが、あのヘリには近づかないほうがいいと忠告した。あのヘリは魔界島専用のヘリであることを三人に説明すると、予定のコースに戻るよう促した。

魔界島は殺人兵器を製造する人工島で、それは種子島と屋久島の間にある小さな島です。日本の警察も立ち入れない危険な島です。ガイドは顔を青くして震えながら口を動かした。拓也は二人に尾行を止めるように説得したが、アンナは頷かなかった。アンナはサリーの言葉に不信感を持っていた。何かを隠しているとひそかに思っていた。

ブラックのヘリは速度を増し南に向かって驀進し始めた。大隅海峡を越えると大島が眼下に飛び込んできた。ヘリはさらに直進し魔界島に向かった。魔界島に着陸したヘリを見届けるとシルバーウイング888はしばらく上空に留まった。ガイドは早く引き返すために、もう一度魔界島の恐ろしさを二人に訴えた。魔界島の周りを取り囲んでいる電波基地は脳波も狂わせるほどの電磁波をいつでも発射できること、さらに島の地下では大量殺人化学兵器を産業用ロボが製造していることなど。

ガイドの恐怖に慄いた表情に拓也も身が振るえ、一刻も早く引き返すべきだと二人を説得したが、アンナの耳には届かなかった。アンナは魔界島に下りる決意をさやかに伝えるとさやかも大きく頷いた。二人は明朝10時に迎えに来てもらう約束をすると魔界島に降り立った。二人が大きく手を振ると拓也は暗い顔で小さく手を振りヘリは飛び去った。

ヘリポート中央から東に20メートル程歩くと、二人を待ってたかのように白鳥ケーブルカーが歓迎した。白鳥ケーブルカーで丘の上まで行くと大きな門が閉まっていた。しばらく門を見上げていると静かに門が開いた。そして、どこからとも無く聞いたことのある声がした。「いらっしゃい、お嬢さんたち」門をくぐると入口の左右にラクダが控えていた。「どうぞお乗りください」とラクダがしゃべるとゴールドのらラクダはアンナの前に、シルバーのラクダはさやかの前に歩み寄り手足を折りたたんだ。

ラクダがゆっくりとピンクの芝生の上を五重の巨塔に向かって歩いていく。右手には五羽のウサギたちの合唱、左手にはチューリップ、スマイル、ヒマワリたちが合唱にあわせてダンスしている。この島は多くのロボがプログラムに従って規則正しい動きをしている。これらの動物は二人の動きをセンサーで確認し島の地下にあるホストコンピューターに情報を送っている。巨塔からは島全体の様子をカメラで監視している。

二人が乗ったラクダは楕円形プールの横にある白いビーチテーブルの横で止まる。テーブルの中央には花柄のビーチパラソル。二人はラクダから降りると気温が秋にしては暖かいことに気づく。テーブルに腰掛け拓也に電話しようとさやかは携帯を取り出す。「電話が通じない。時計も止まっているわ。どうしたの？」さやかは何度も携帯にタッチする。アンナも時計を見たが止まっていた。アンナが驚いて立ち上がると、無表情の少女が錠剤を運んできた。

プレートの小皿には五色の粒が二個ずつ乗っていた。赤はタンパク、黄色はエネルギー、青はビタミン、白はカルシウム、紫はホルモンとなっていますと機械的に説明すると少女は消えた。アンナは五つの錠剤を一気に飲み込むとデミカップの赤いジュースをグウィと飲んだ。「この薬、きつとこの島で暮らすのに必要な薬ね」さやかは一粒ずつ味わいながら飲み込んだ。

「腹へった」アンナはおなかに手を当てる。さやかは今の時間は分からなかったが12時30分を過ぎていると腹時計で感じた。アンナがこぶしでテーブルをたたくと体が宙に浮いた。「助けて、さやか」アンナは突然の無重力に驚く。これは人工島の重力が千分の一に操作されている。50キロのアンナは50グラムになった。「いったい、誰のいたずらよ」アンナは悲鳴を上げる。二人を五重の巨塔に誘導するために地下のホストコンピューターが重力制御を行ったのだ。

さやかも軽くジャンプするとふわりと宙に浮いた。二人がはしゃいでいると五重の巨塔の方角から二人のキューピットが飛んできた。金の羽と銀の羽のキューピットは二人に金の紐と銀の紐を各自しっかり握るように言うと、二人を引っ張って五重の巨塔に向かって飛んでいった。キューピットは二人を5Fに着陸させると南に向かって飛び去った。着陸した二人は急に体が重くなった。巨塔の重力は三分の一に制御されていた。

二人が座り込んでいるとサリーと桂会長がゆっくり近づいてきた。サリーが二人に手を貸すと、ベランダのテーブルに案内した。そこにはステーキとスープが用意されていた。アンナはお礼も言わず即座に肉を切ると大きな口に放り込んだ。さやかはいただきますと手を合わせると、小さな口でスープを一口飲んだ。「二人とも、疲れたでしょう。ゆっくりお食事してくださいね。食べたいものがあれば何でもおっしゃってね」サリーは無心に口を動かしている二人に優しく声をかけた。

アンナは一気に食べ終わるとオレンジジュースをグウィと喉に流し込んだ。食べ終わったアンナを桂会長は優しい瞳で見つめていた。アンナは口の周りにソースがついていると思いナプキンで口をしきりに拭いた。さやかがジュースのグラスに唇をつけると彼はゆっくりと二人に話しかけた。「この研究所は気に入ってくれましたか？」さやかはグラスから唇を離すと目を吊り上げた。

「ここは殺人兵器を造る島でしょ」さやかは強い口調で攻撃した。「確かに、ビジネスとして兵器は製造してはいるが、インド、中近東、アフリカへの支援物資も製造してるんじゃ。世界平和のための研究所だよ」老人は笑顔でさやかに応えた。「お言葉ですが、世界平和というのは間違ってます。殺人兵器で多くの子供たちが亡くなっているのです。一刻も早く兵器の製造を停止してください」さやかの顔は真っ赤になっていた。

「これは恐れ入った。まあ～、資本主義というのは所詮こんなものだよ。分かってくれませんか、さやかさん。確かに、科学の進歩には弊害もある。だが、人間の限界を超えるのが科学なんじゃよ。現に、ポルシェ・クイーン社が開発した無人のコンピューター制御で走る*GTモンスター*だが、GTモンスターのラップレコードはいまだ破られてない。つまり、人間には限界があるということじゃよ。それじゃ、二人の勇気に応えてプレゼントを差し上げよう。2秒のハンデをやることにしてモンスターのタイムと勝負してみてもうどうかな。もしこの勝負に勝てばフェラーリと今後のレース費用をプレゼントしようじゃないか。どうかね、アンナさん」桂会長は結果が明らかかな勝負を持ちかけた。

「アンナさん、いいお話じゃない。勝負なされては？」サリーはアンナが勝つ可能性があるような話しぶりをした。サリーはレースのことがまったく分かっていないとアンナは思った。なにが目的で結果がはっきりした勝負を持ち出したのかアンナには理解できなかった。プロが勝てないモンスターにアマのアンナが勝つことは奇跡が起きない限りありえない。サリーから何か手がかりを得るつもりで魔界島に乗り込んだのだが、桂会長の不意打ちのパンチをくらい窮地に追いこまれた。

「モンスターと、勝負します！」さやかが勢いよく返事した。さやかのヒステリーは治まらない。さやかはレースのことはまったくわかっていない。アンナはしばらく目を大きくしてさやかの顔を見つめていたが、ゆっくりと頷いた。ここまできたら引き下がるわけには行かなかった。一つでも手がかりをつかんで魔界島を脱出したかった。「それじゃ、負けたらどうしろと言われるのですか？」アンナは桂会長の企みに探りを入れた。「そのことじゃが、別に驚くほどの条件じゃない。さやかさんに魔界島で働いてもらえばいいんじゃない」さやかの顔が一気に引きつった。しかし、桂会長との決闘の決意は変わらなかった。

「サリーさんは桂会長のお友達ですか？」腹を決めたアンナはゆっくりと落ち着いて訊ねた。「桂会長はクラブ・リリーのお客様です。時々、研究所に招待してくださるのよ。そう、明日のために、桂会長ご自慢の赤のフェラーリを試乗なされてはいかが」サリーは勝負は明日であることを告げた。アンナは背水の陣で魔界島のサーキットに向かった。

運よく魔界島のサーキットはいつも走っている鈴鹿サーキットとほとんど同じであった。17のコーナーに勝負を決されると言われるS字コーナー、違っていたのは最終コーナーのRが少し大きいのと、それからゴールへの直線距離が300メートル長い。モンスターのタイムは1分49秒842と知らされていた。ということはアンナは1分51秒842以下で走らなければならないことになる。アンナは何度かラップを計ったが、奇跡的最速タイムで1分52秒548であった。

アンナの敗北は確実となった。もし、負けた場合、さやかは奴隷のように魔界島で一生働かされる。アンナはレースをあきらめ他の謝罪方法を考えたが名案は浮かばなかった。突然、二人が出会った孤児院が脳裏に現れた。8歳のアンナは初めてさやかと出会った。さやかは3歳のときからこの孤児院で暮らしていた。そのとき、アンナを妹のようにかわいがってくれた。

なにをするにも二人だった。二人でいればどんな悲しみも乗り越えられた。両親がいないさやかは子供が大好きだった。アンナは男のような性格でバイク、車が大好きだった。いつしか、二人は孤児院を建てる夢を持つようになった。しかし、ここで二人が引き裂かれたらアンナの心は折れてしまう。恐怖が一度に爆発し全身が震えだした。アンナは右手で十字をきると、レイナが残した十字架のペンダントをつけて目を閉じた。

一睡もできなかったアンナは各コーナーの限界速度のことを何度もイメージしていた。今のままでは負けてしまう。スピンを覚悟で勝負に出れば勝てないことも無いが、スピンすればそこで勝負はついてしまう。そして、さやかとアンナは引き裂かれてしまう。

スタート時間、10秒前。アンナは胸の十字架を握り締めた。3、2、1、スタートのフラッグは振られた。フェラーリは雄たけびをあげた。

さやかと桂会長は五重の巨塔のリビングでハイビジョンモニターに映し出された真っ赤なフェラーリをじっと見つめていた。桂会長は二人の決断に驚いていた。まったく勝ち目が無い勝負に挑んだ二人に対してほんの少し畏敬の念を感じた。しかし、さやかを手に入れることに関しては容赦しなかった。すべて計画通りにことは進んだ。

S字コーナーは完璧なラインをとった。各コーナーもいつもの速度で通過できた。しかし、結果のタイムは予想されていた。さやかとの別れがアンナの脳裏をよぎった。涙が突然あふれでた。もはや冷静ではいられなくなっていた。アンナは神に祈り、最終コーナーで限界速度に挑戦した。「ママ」悲鳴とともにアンナはアクセルを踏んだ。

さやかはスタートからずっと神に祈っていた。アンナの勝利を信じていた。桂会長は勝利を目前にしてソファで走りを眺めていたが、最終コーナーに突入したアンナを見て目を閉じた。アンナの安否を気遣ったのだ。スピンすれば生死をさまよう大事故になる。彼も神に祈った。命だけはお守りくださいと。

彼が目を開けるとフェラーリはゴールに向かって驀進していた。MAXスピードはモンスター以上にチューニングされてあった。37・38・39・40・41時間は止まった。タイムは1分51秒841であった。アンナはあふれる涙で何も見えなかった。「やった、勝った！勝った！」さやかからの無線の悲鳴を聞くと気を失った。

さやかは涙が止まらなかった。奇跡は起きた。さやかは涙を流しサーキットに飛んでいくとアンナをしっかりと抱きしめた。アンナはさやかとの別れを阻止できたことで涙が止まらなかった

。

10時に迎えのヘリがやってきた。二人は桂会長と別れの挨拶をしようとしたが彼の姿は無かった。代わりにサリーが飛び立つ二人に大きく手を振った。彼は五重の巨塔のリビングにいた。大きなモニターに映し出された飛び立つヘリを一人じっと見つめていた。そして、宝石箱から十字架のペンダントを取り出すと首にかけた。それは再会の約束を誓って、レイナからプレゼントされたペンダントであった。

魔界島の決闘

<http://p.booklog.jp/book/42242>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42242>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42242>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.